

の時、宗統復古の発願を起し、師一線道播の下で着々と宗師家の道を歩み、遂に延宝四年（四十一歳）、師の命によって王子山観清寺に住したという事は、特別な事情の説明がない限り一線の法を嗣いだと見て差し支えないように思われる。その二年後、大乘寺月舟に参じて師資契合という順序となる訳であるから、ここに重嗣の問題がありはしないかという事である。かく言うことは、敢えて人の粗探しを目的とするのではない。唯、宗統復古は、この事が問題であったからである。当時の趨勢が卍山をも巻き込むほどのものであったのであろうか。或は卍山の宗統復古運動が、内にその痛みを抱えながら、それが故に一層厳しく推行されていったのであろうか。さすれば、師の人間像は、従来にも増して並々ならぬものとなって来るのではないか。これらを不明のまま放置することは、却って人の真の偉大さを陰蔽してしまふ。筆者の疑問は、すでに烏有であるのかも知れない。しかし、従来の文献において此の問題を明瞭にしたものを小見の故か見ていないし、本書でもこの点には触れられていない。この機会にこれに明確な指示を冀うと共に、突込んだ研究の出現を期待して敢て記してみたのである。

『初期中国華嚴思想の研究』（吉津）

最後に、本書には、両師関係の研究文献が付されて、研究者の便に供されている。宗門では、両師の著述には多大の恩恵に浴している関係上、よく参究されていると思われるが、研究書、研究論文は、数量に限っても甚だ貧弱である。近代に至る宗旨の伝統は、江戸宗学を機軸としたものであると言われる。従って江戸期の宗学が、新しい学的研究の上に洗い直されなければ、宗祖の宗学にまで遡上することは至難である。この代表される両者の

木村清孝著

『初期中国華嚴思想の研究』

吉津 宜 英

昭和三十四年までの華嚴学の主な成果については『華嚴思想』（法蔵館、昭和三十五年二月）に収められている鎌田茂雄「華嚴学の典籍および研究文献」によって我々は容易にその全貌を知ることが出来る。そして、それ以後の華嚴学の成果を語ることはまさに鎌田博士の研究と業績の歴史を陳べることになると言つても過言ではあるまい。もちろん、『印

研究が、未だかかる現状であるという事は、江戸宗学全般の研究が、殆ど本格的には緒についていないことを意味している。この本書附載の目録は、我々にその怠慢を警覚して、るように思われる。本書の刊行を契機として、この方面の研究を自らも充実し、願わくは結集総合化されることを切望するものである。

（講談社、昭和五三年一月、一、八〇〇円、A5版、図版二頁、序・目次九頁、本文三四〇頁）

度学仏教学研究』を披見する時、毎号ごとに華嚴学関係の成果が散見するのではあるが、その問題意識・着想・方法・業績のいづれにおいても博士が華嚴学をリードしてこられた。そのことは以下に列挙する著作によって知られるのである。すなわち東京大学に提出された学位論文の公刊である『中国華嚴思想史の研究』（東京大学出版会、昭和四十年三

月）、『中国仏教思想史研究』（春秋社、昭和四十三年三月）、『無限の世界観』（共著、角川書店、仏教の思想第六巻、昭和四十四年一月）、『鎌倉旧仏教』（共著、岩波書店、日本思想大系15、昭和四十六年十一月）、『禅源諸詮集都序』（筑摩書房、禅の語録9、昭和四十六年十二月）、『原人論』（明德出版社、昭和四十八年）、『宗密教学の思想史的研究』（東京大学出版会、昭和五十年三月）などが次々と刊行されたのである。特に『宗密教学の思想史的研究』は、「中国華嚴思想史の研究 第二」という副題を付されていることによって、冒頭に挙げた博士論文を継承し、澄観の研究に続けて、宗密研究を遂行された成果であることがわかる。しかもその成果は『鎌倉旧仏教』『禅源諸詮集都序』『原人論』などのような詳細な原典研究の上に生み出されたものであることを忘れてはならない。この『宗密教学の思想史的研究』が昭和五十一年度の日本学士院賞を受賞したことは、博士のこれまでの研究業績からすれば当然のことである。しかし、その評価は単に博士の華嚴学の成果に対して与えられたものと我々は考えてはいけないのであり、博士の意図が儒仏道三教の対立・交流・融合の史的過程の解明、つ

まり中国宗教史研究の一環としての中国仏教研究であって、華嚴学も当然そのような視点より研究がなされることはすでに『中国華嚴思想史の研究』の「序」において明記されている。従来のような僧名と教理の羅列の中国仏教史から、三教交渉に着目し、さらに中国の社会経済史的研究に対する考慮をも加えた中国仏教史へ、その転回を可能にしたものは博士の道教研究ななく、仏道交渉の研究であったのではないかと思う。その成果は『中国仏教思想史研究』の第一部「仏道両思想の交流」として纏められている。そして『中国仏教史』（岩波全書、昭和五十三年九月）はこれまで述べてきたような博士の方法論による集大成であり、その旧版宇井伯寿『支那仏教史』（昭和十一年九月）と比べてみるならば、中国仏教史研究の進展の様相を確かめることができる。そこに博士独自の意図が貫ぬかれていることを認めることができる。つまり従来の教理偏重に対して、儀礼や教団史さらには文化史などの成果を十分に踏えたことである。特に儀礼については長年にわたる学術調査にもとづくのであり、第二十九回印度学仏教学大会の研究発表「中国の仏教儀礼——道教儀礼との混淆をめぐって——」も

その成果の一端を示されたが、いづれは著書として公刊される御予定と承っている。

これまで鎌田茂雄博士の業績について、焦点の合非を顧みず述べてきたのは、現時点において華嚴学を学ぶ場合には先ず先生の著書を読み、従って華嚴関係の成果を論評する場合、先生の成果に触れぬわけにはいかないからである。今ここで取り上げたいのは木村清孝著『初期中国華嚴思想の研究』（春秋社、昭和五十二年十月）であるが、本書も多くの点で鎌田博士の華嚴学の成果を継承していることが指摘できるのである。これは私の主観によるのではなく、著者自らが本文の中で何回も指摘している（本書、一一四頁・一二六頁・一三三頁・一七六頁・三〇〇頁・三二七頁・四九〇頁）ことである。

さて、本書はその序文に自ら書かれているように、昭和五十年八月、東京大学に提出された学位論文を公刊したものである。今はまずその目次の大綱を掲げてみよう。

序文

第一篇 華嚴的思想の形成

第一章 『華嚴経』の伝訳

第二章 華嚴経研究史概観

第三章 華嚴經學習者の実践的立場

第四章 華嚴經觀の展開

第五章 偽経と『華嚴経』

第六章 華嚴経思想の受容

第七章 華嚴教学への道

第二篇 智儼とその思想

第一章 杜順から智儼へ

第二章 智儼伝の解明

第三章 華嚴経觀の特質

第四章 二種十仏説の成立

第五章 海印三昧

第六章 法界縁起説の原型

第七章 成仏道の実践

まず本書の表題に『初期中国華嚴思想の研究』とあるなかの初期とは法蔵(六四三—七一〇)以前、つまり智儼(六〇二—六六八)までを示す。次に華嚴思想とは「華嚴経にもとづいて形成された思想一般」を意味し、いわゆる後の華嚴宗の華嚴教学という呼称よりも広い概念であるが、また単に華嚴経の思想という場合よりも中国において独特に形成されたという限定的な内容を持っている。先の日次の大綱で明らかかなように本書は二篇十四章で構成されている。今は著者自身の序文による内容要約によりながら、各章の特色を紹介したい。

第一篇は華嚴経が中国に伝訳されて以後、

初唐代に華嚴教学が成立するまでの間に、中国仏教者が華嚴経とどのように取り組み、それから何を吸収し、いかなる思想を形成していったかを明らかにし、華嚴教学の誕生に至る経緯を考察する。ここで華嚴的思想とは何かについて、著者の規定はないが、第七章「華嚴教学への道」のところで述べる一即一切の思惟、事理無礙的な、あるいは性起につながる思想とあるのが、それに相当するであろう。

第一章「華嚴経の伝訳」は六十巻本華嚴経および華嚴関係の經典類がどのように訳出されたかを考察するが、特に第一節第二項で論述されている本無義との関連から等目菩薩経や度世品経の訳語の検討は注目される。後には真如と訳される *śūnyatā* が、竺法護あたりまでは本無と翻訳され、その訳語には荘子の思想との関連も指摘される。華嚴経十定品の異訳である等目菩薩経では、その本無が法界と結びつけられ、さらに離世間品の異訳である度世品経では法界に関して「玄之亦玄」つまり老子の重玄説が導入され、華嚴経類の伝訳に老荘的なものが加えられることによっ

て、いわゆる華嚴的思想の發生の基盤となつたとされる。

第二章「華嚴経研究史概観」は六十華嚴経訳出前後から隋代までの南北兩朝にわたっての華嚴経研究の歴史を概観し、北地の地論学、南地の三論学における研究にまず注目し、さらに新しい研究者グループとしての撰論学派に考察を進め、彼ら撰論学の研究成果が智儼・法蔵の華嚴教学に結実してゆくことを示唆している。

第三章「華嚴経學習者の実践的立場」では第二章がいわば学問的な研究の歴史の概観であったのを承けて、彼らをも含めて、華嚴経を学習した人々の実践を分類し論究した。信仰としては(1)文殊(2)觀音(3)弥勒(4)西方浄土(5)賢首国(6)蓮華蔵世界の六種に分け、また彼らの実践形態として(1)戒律(2)禪定(3)諷誦・転読・書写(4)礼拝・礼讚(5)華嚴斎の五種に分けて論究している。ここで華嚴斎については鎌田茂雄『中国華嚴思想史の研究』においては華嚴宗成立の社会的背景の有力な一因としていえるが、著者は華嚴斎と華嚴宗の成立との間には直接的関係はないと述べている(七一頁)。しかしながら、一つの共通の理念を持った人々が食事を共にしつつ法談を行う齋会は宗派

形成の要因としては無視できないのではあるまいか。この点は私は鎌田博士の仮説をもっと追求してみたいと思う。ただその場合、法蔵の華嚴経伝記はかなり法蔵の意図を含んだ内容をもっているようであるから、華嚴経伝記の記事によって直接的に彼以前の種々の実践を云云することは注意する必要があるのではないか。そう言ってしまうえば統高僧伝にも道宣の意図が含まれているから公正さを欠いているということになり、南北朝から隋唐にかけての仏教史は記述できぬことにもなり、確かにこの議論も現今の中国仏教研究からすれば検討の余地のあるものと思うが、それらの点を考慮しても、統高僧伝に比較して華嚴経伝記には一段と意図的構成が伺われるので、それを用いて事実として論ずることは細心の注意が必要であると思う。

第四章「華嚴経観の展開」では隋代までの中国仏教において『華嚴経』が教判の中でどのように位置づけられたか、また華嚴経の中心的な教えをどのように把握していたかを宗趣論によって考察する。教判の視点からは華嚴経は頓教・常宗・破相宗・顕実宗・法界宗・円教などとして把握され、常に究極的な高い教えとして位置づけられたことがまず指摘

される。宗趣の追求の観点からは、まず法蔵の探玄記、慧苑の刊定記、澄観の華嚴経疏のそれぞれに列挙されている前代の各師の宗趣論を整理し、三者が共通して出しているものから検討を加える。印師・敏師等の因果宗趣説や大遠法師の華嚴三昧宗趣説などが順次に取り上げられ、それらの種類の宗趣論の試みが華嚴教学における独特の宗趣論を生み出し、更に華嚴教学の根本的把握に結びつく面を持つていたとされる。

第五章「偽経と華嚴経」は中国仏教の一つの特色とされる偽経の成立が華嚴経とどのように関係しているか、それらの偽経は華嚴経から何を摂取したのかを追求した章である。

「大方広華嚴十悪品経」「像法決疑経」「究竟大悲経」「法王経」「梵網経」「菩薩瓔珞本業経」などが順次検討されるが、特に像法決疑経の考察は詳細を極めていく。結論的には単に華嚴の名を借りて經典の権成を高めようとした「十悪品」のようなもの、華嚴経の構成を借りた「梵網経」のようなもの、華嚴経の思想を取り入れた他の諸経というように三類に分けられるとされる。

第六章「華嚴経思想の受容」では、第二章のように僧伝類に華嚴の研究であると明

記されているのではなくても、現存している著作に顕著に華嚴経の影響が見られる場合に、その事実の指摘とその教学者の思想と華嚴思想との関連とを考察する。曇鸞・慧影・慧遠・智顛・吉蔵の五人の教学者たちが取り上げられているが、後の華嚴教学との関係から見て三階教の信行については一節加えてはしかなかったと思う。

第七章「華嚴教学への道」は智儼以前において華嚴教学的思惟の萌芽と華嚴教学形成の思想的基盤を探ろうとした章である。具体的には北魏の靈弁の華嚴思想、仙城慧命の詳玄賦の世界、曇遷の亡是非論の思想、地論南道派の法界縁起思想の四つが取り上げられている。慧命や曇遷のものは智儼が孔目章の中で引用して、高い評価を与えているところから華嚴教学への道の一つとして取り上げられることでもできようが、靈弁の『華嚴論』や地論学南道派の慧遠の『大乘義章』については智儼や法蔵の著作における引用関係およびその影響にはまだ検討の余地があり、私自身は南道派の教学を直接に華嚴教学に結びつけることはできないと思う。もちろん著者はそのような短絡をしておられないが、私は何故にこれら四つのものを華嚴教学への道として取り上

げるのかという準則を明記してほしかったと思う。

以上の七章が第一篇を構成する。智儼以前の華嚴思想に関わる事項はほとんど網羅されているように思う。第一篇で扱われていることは華嚴思想としてはいづれも大切であるかもしれないが、華嚴教学の立場から見るとこれとこれは重要であるという取り扱ひの濃淡はあってもよいのではないかと思う。さて第二篇は「智儼とその思想」と題され、従来ややもすればその存在を軽視されがちであった智儼の華嚴教学を思想的に解明することを旨とする。本篇も全体で七章で構成されている。

第一章「杜順から智儼へ」は智儼の師・杜順について、特にその法界観門を問題にしつつ、その歴史性と華嚴教学との関わりを論究したものである。法界観門については古来より杜順撰の真偽について議論があり、著者は「法界観門撰者考」(『宗教研究』一九五、昭和四十三年六月)という論文で、思想的な観点から本書を杜順撰とする見方に疑問を投げかけ、その著者の説に反論する形で結城令聞博士が「華嚴の初祖杜順と法界観門の著者との問題」(『印仏研』一八一、昭和四十四年十二月)を發表して、本書の杜順真撰説を

主張された。著者は結城博士の説に再度反論する。そして法界観門は法蔵の發菩提心章から誰かが八世紀後半までに抜き出したものではないかと推論する。私にはこの推論を判定する力はないが、もしも杜順にそのような著作があるとすれば、智儼や法蔵の著作にその影響は必ずや表われるはずではないかと思う。その点では著者の論究の方に荷担するが、法蔵の發菩提心章という著作も更に考究の余地を残しているのではないかと思う。ともかくも杜順から法界観門を取り上げると単に智儼の師としての杜順ということになるわけであるが、著者は杜順を華嚴宗の初祖とすることを否定していない。第六章「法界縁起説の原型」では杜順の説を承けて智儼が撰述したとされる「華嚴一乘十玄門」について、何らのテキスト論の展開もないままに智儼の思想として論述されるところから判断すると、著者は法界観門は杜順のものではないが杜順の思想は智儼と同一のものであってよいと考えておられるのであろうか。私は杜順の名前の冠せられた、あるいは関連せしめられた著作はすべて保留にして再検討すべきではないかと思う。著者がこの第一章の結びにおいて初祖杜順を認めたことは私には腑に落ち

ないのであり、その認識が一乘十玄門の資料論の問題と結びついているのではないかと思う。こう言ったからと言って私は従来のような智儼初祖説や智正初祖説などを主張しようとは思わない。華嚴宗に初祖を立てる意図は後代のもの、具体的には宗密あたりからではないかと思われ、智儼や法蔵の教学の研究に初祖云云の問題を持ち込む必要はないと思う。

第二章「智儼伝の解明」は智儼の生涯、彼の師承、学問の性格、著作、門弟、社会的背景などを詳細に論述したものである。生涯については法蔵の華嚴経伝記によって記述し、師承も同様に華嚴伝記によるが、そこに出る杜順以外の達法師・常法師・弁法師・琳法師・智正法師など智儼の就学した人々を統高僧伝にたづね、智儼の学問が攝大乘論の研究から華嚴経の研究へと移行したとされる。著作に関しては諸種の目録や新羅系の資料によって細密な考証の結果、搜玄記五卷・五十要問答二卷・孔目章四卷・一乘十玄門一卷・金剛般若経略疏二卷・無性釈撰論疏四卷・供養十門儀式一卷の七書は真撰であるとされる。門弟としては諸伝は全体で八人の名前を掲げているが、法蔵と義湘とが重要である。社会的

背景としては初唐の政治と文化・初唐三帝の
仏教政策・初唐における儒道二教の三項に分
けて論じられ、初唐の国際的文化・初唐にお
ける道教の重視、そして仏道二教の論争など
が取り上げられる。本章においては学問の性
格のところでは智儼の学問が撰論から華嚴経へ
と移行してゆくとの指摘はあるが、坂本幸男
『華嚴教学の研究』（平楽寺書店、昭和三十一年三月）第二部第三章で提起された玄奘三蔵
所伝の唯識仏教に対する態度の問題に関して
何らかの形で論究してはしなかったと思う。初
唐の政治と文化の項目においては玄奘三蔵の
訳業は特筆すべき文化事業ではないか。智儼
は何故に無性撰論疏を著わしたのであるか。
智儼の一乗思想の理解は玄奘のもたらした三
乗思想を抜きにしては不可能であろう。

第三章「華嚴経観の特質」から第七章まで
はすべて智儼の思想の特質を説明することを
目指している。第三章は第一節第四章「華嚴
経観の展開」と呼応し、教判論の視点からの
華嚴経の位置づけ、華嚴経と菩薩瓔珞本業経
や梵網経などの扱い方の違い、搜玄記におけ
る経名解釈、そして宗趣などの関点から、彼
独自の華嚴経に対する見方を考察する。教判
の面では、搜玄記において、華嚴経を漸頓円
三教の頓円二教に位置づけ、五十要問答では
小乘三乗一乗の分別において同経を一乗に配
当し、そこで華嚴をめぐって漸頓円と小三一
の二つの教判論があることになり、それらの
相互の組み合わせから、後の五教判に類似の
教判が数種類も指摘される、つまり智儼にお
いては法蔵のように小始終頓円の定型化した
教判ではなく、もっとゆるやかなものであつ
たことが示される。それは同別二教判に関し
ても同様であり、共不共の二教とも、通別の
二教とも言う、流動的な解釈であつた。
華嚴経と菩薩瓔珞本業経や梵網経などの扱
いの問題は第一節第五章「偽経と華嚴経」と
関連する。しかし、智儼はこれら二経を真経
とみなしている。結論的には華嚴経は一乗に
属し、他の二経は三乗教に配されるというこ
とであるが、このような智儼の解釈を知った
眼で第一節第五章をひるがえって考えてみる
と、梵網経などを偽経として論ずる現代の我
々の意識と智儼のそれとの間に經典観に関し
て大きな隔たりがあるようであり、何が真経
であり、何が偽経であるかを問題にするより
もその意識の差こそ先づ問題にすべきことでは
ないかと感ずる。

第四章「二種十仏説の成立」では智儼にお
ける仏身観の確立過程を説明しようとする。
そのため智儼以前の仏身観をたどり、牟子の
理惑論の内容を分析し、道徳的仏身観を抽出
し、それは支遁・孫綽・宗炳などにも展開さ
れているとされる。その仏身観がいわば格義
的仏身観であるとすれば、廬山の慧遠や僧肇
の仏身観にはそれを止揚しようとの意図が見
出されると主張する。特に僧肇の教学の中に
中国仏教固有の仏身観の原型ができあがって
いるのではないかと問題を提起する。
二種十仏説とはまず五十要問答に引かれる
華嚴経離世間品（大正九卷、六六三頁中）の
十仏と、孔目章で注目される十地品（大正九
卷、五六五頁中）の十仏とであり、孔目章で
は前者を行境の十仏、後者を解境の十仏と呼
ぶが、著者は五十要問答から孔目章への展開、
つまり行境の十仏から二種十仏説への展開の
中に智儼における哲学的思索の発展と彼自身
の現実的世界への還帰を推測している。私は
あえて疑問を呈するならば、そのような智儼
の仏身観と先ほどの道徳的仏身観や、それを
止揚して中国仏教の仏身観の原型を示したと
規定された僧肇のそれとは、どのように連関
するのであるか。本章の結びにおいて、そ
の点に関して一言もないので疑問を呈してお

きたい。

第五章「海印三昧」は従来の華嚴学の伝統に則って、智儼における海印三昧を問題にしたものである。搜玄記にはあまり海印三昧を重視してはいないが、一乗一玄門には注意すべき海印三昧の規定、つまり同時具足相應門において同時性を成り立たせる根底としての海印三昧が主張され、さらに五十要問答では十仏との関連において海印三昧が説かれ、孔目章になると一乗の教義が直接海印三昧によって根拠づけられるようになる。つまり智儼の海印三昧論は次第に端的に「海印三昧」論となり、海印三昧の一元性が明瞭になってくる、と結んでいる。また新羅の義湘の学系に伝承された五種海印説も検討され、それが智儼のものかどうかの判断は保留にされている。

第六章「法界縁起説の原型」は後代の華嚴教学の中心教理である法界縁起説の原型を智儼において考察しようとする。すでに第一篇第七章第四節「地論南道派の法界縁起思想」において法界縁起の萌芽が論究され、本章はそれを承けているが、まず仏教一般の法界の語義を明らかにし、次に搜玄記と一乗十玄門との二著について法界縁起を考究してゆく。

特に一乗十玄門の考究は詳細を極め、あたかも注釈のような体裁になっている。搜玄記における法界縁起は十地品第六現前地の注釈の中に見られるもので浄分縁起については①本有②本有修生③修生④修生本有の四門、染分縁起については①縁起一心門②依持一心門の二門に分けられ、そのうち縁起一心門は①真妄縁集門②撰本従末門③撰末従本門の三門に分けられる。これらの構成は慧遠の縁起説に負っている、と指摘される。次に一乗十玄門における法界縁起は相即相入と十玄門の説示から成立している。十玄門は搜玄記にも出ているが、それよりも詳細であり、数の譬喩による相即相入の理論は独自のものである。著者はこの一乗十玄門の思想が、地論学派の教説や種々の大乘経論の内容を選択的に撰取しつつ形成された、すぐれた体系を有する教説であると述べている。

次に法界縁起に関連して、「六義と六相」および「性起」とが各別に論じられる。法蔵の五教章の義理分齊では法界縁起が①三性同異義②縁起因門六義法③十玄縁起無礙法④六相円融義の四門に分けて述べられているが、そのうち③についてはすでに智儼において体系化した教説となっていたことを確めたわけ

であるが、②や④についても搜玄記にその萌芽は見い出されるので、法蔵の創唱は①のみということになる、と言われる。性起に関しては資料はあまり多くないが、縁起との関連においては見逃すことのできない意味を有しているとし、搜玄記の普賢菩薩行品疏、性起品疏、さらに孔目章の「性起品明性起章」などの要文を検討し、性起ということが法界縁起の究極的事態を明らかにするものであると述べる。しかし性起が真実に貫かれた智の世界として、つまり清浄無垢なる心として展開するのに対して、法界縁起が染浄両方の心に関わる事実であるという差異の面にも注意を喚起する。著者は本章の結びにおいて二つのことを確認する。その第一は法界縁起思想の基調を相即的思想と考えるならば、それは一方では初期大乘の思想にまで遡ることができ、他方では中国固有の易や老荘の思想に遡ることもできようが、仮に智儼以前の中国仏教に限定してみても僧肇の即事而真的思想など多くの類似のものを数えることができ、つまり華嚴的思想の核である法界縁起の基調である相即的思想は、少くとも東晋末以後、中国仏教に幅広く展開した実践的世界観の一つの論理的表現なのではないか、とい

うことである。第二には搜玄記にみられるように種々の縁起の形態の総体を法界縁起としていることから知られるように、彼の縁起説は大乗仏教の縁起説の学問的研究の総合的成果であって、そこに智儼の初期の学問的態度を伺うことができる、としている。私は本章に対しては前にも述べたように一乗十玄門については再検討の必要性を感じるものであるが、著者の法界縁起の原型に迫ろうとする熱意には敬服する。

第七章「成仏道の実践」は智儼の実践論を扱う。一乗の成仏では、小乗や三乗の修道に對して、依正二報ともに成仏することがその成仏の内容とされ、さらに一念成仏・疾得成仏が論究される。その疾得成仏は一念成仏が無念成仏として徹底化された所に実現される、智儼における頓悟成仏である。最後に仏道実践の具体相として①唯識観②空観③五停心観④通観⑤壁観・盲観の五種の観法を取り上げ考察を加える。そして中でも唯識観・空観・通観が重視されているが、むしろいかなる観法をも是認するという態度で貫かれているとし、そのような是認の根拠としては、第一に彼は観そのものの限らない深まりを確信し、どのような観法でも一乗の世界につな

がっている手立てであって、否定すべき観法はないと考えたこと、第二には智儼が人間の迷いの現実に眼を据え、とくに初心者に対する對機的・方便的な立場を重んじたこと、の二つを指摘する。彼が説明を加えている観法は彼自身の実習を通じたものと考えられ、そのような観行の限らない深まりの中で、念念の成仏が主体的に実現される道を自由に歩み続けることこそ、智儼の願いであつたと思ふと著者は結んでいる。

以上で全体を概観したのであるが、できるだけ著者の真意の把握につとめたつもりではあるが思わぬ方向がちをしているかもしれない。また私自身の意見も途中でさしはさみ、著者に対して汗顔のいたりであるが諒解していただきたい。最後に総括的な意見を述べてみたい。まず全体の構成について、第一篇の「華嚴的思惟の形成」と第二篇の「智儼とその思想」との関連の問題であるが、きわめて密接な連関を持っている場合もあるが、第一篇の内容が第二篇に生かされていない場合、あるいは第二篇の内容が第一篇との関係を持たせず論じられている場合、我々はそれらをどのように考えるべきであろうか。第一篇に吉蔵や智顛の思想があればほどこまで丁寧に論

究されると我々は第二篇のどこかにおいて、彼らの一乗義と對比した意味での智儼の一乗思想を知りたいと思ふ、また第二篇で智儼の頓悟が彼にとつては重要な思想であると指示されれば、第一篇のどこかに竺道生の頓悟説がどうして扱ってないのだろうと思ふ。著者が智儼以前の華嚴的思惟の流れの中に智儼の思想を浮べ、その独自性を説明するという手法を取られたとするならば、この両篇の対応はもつともつと緊密であつてしかるべきではないかと思ふ。

次に、今ふれた著者のとられた手法、いわば方法こそ問題にしなくてはならない。智儼以前の華嚴的思惟の形成が明らかになれば智儼の思想は解明されるのであろうか。確かに智儼が意識したものは智儼以前の種々の存在ではあるだろう。しかし彼自身の宗教性は彼以後に發揮されている面もあるのではないか。いはば彼の思想の分析は伝記と著作の分析だけでは不可能なのではないか。智儼門下の法蔵や義湘が始まる場所の智儼研究の歴史、現代に至るまでの智儼研究史を明らかにしておくことこそが、智儼を意識し、彼を研究する前提でなくてはならないと考える。そして実は研究者自体も純粋な客観的態度は許

されず、その研究史の末端に連なって、独自の意見を言いつづけざるを得ないのである。著者は対象を「初期」と限定した。しかし、実際には初期を理解するために後期の資料も用いている。私はもっともつと後代の資料を用いて、それをして語らしめ、最後は著者の裁断によって判定してゆくという方法を取るべきではないかと思う。著者の取られた方法は客観的ではあるが、その方法では、いはば主観の羅列のごとき宗教思想の歴史を主体的に把握しえるかどうか、疑問を呈さざるを得ないのである。

私は冒頭で鎌田茂雄博士の業績について論じた。博士が華嚴思想史研究の第一歩として華嚴学の研究の歴史を回顧されたことを我々の亀鑑としなくてはならないと思う。著者の意識においては智儼研究の歴史は明らかにされていることと思うが、本書の表面にはその総括は示されていないと思う。どうか、その総括を冒頭に提示して、智儼教学の思想史的研究を遂行されることを念願したい。

(春秋社、昭和五十二年十月発行、八、五〇〇円、B5版、本文六一五頁・索引および英文梗概三三頁)

『本居宣長』(袴谷)

小林秀雄著

『本居宣長』

一

昨年十月三十日の奥付をもって、小林秀雄の『本居宣長』が新潮社より刊行された。周知のように、これは『新潮』昭和四十年六月号より五十一年十二月号まで連載されたものを収録したもので、その終章のみがこの度の出版に際して書き加えられたものようである。本書は、既に高い評価と共に広く世に迎えられるに十分なほど、今さら私がどうこういう筋のものではない。ただ私としては、言葉についてこれほど熟慮された書物が、我々仏教を学ぶ者の間にはほとんど希有であるということを痛切に感ずるので、この点から本書に触れてみたいと思うだけである。

二

連載の初回が昭和四十年六月だったとは、

袴谷 憲 昭

今回改めて正確に知ることを得たわけだが、曆に刻まれた時がかくも長時間だったかという方がむしろ私を驚かす。連載中は毎回購読し、二十数回までは整本までして所持していたが、精神の怠惰と行動の多忙のために、購入も立ち切れとなり、整本した愛用のものまで知人に借したままになってしまったが、そのころの記憶はすぐ私の手元にあるという気がするのである。

こんなわけで、時の順序を確認するために小林の年譜を繰ることになったが、それによれば、私の愛読した『考えるヒント』は、連載開始の前年、昭和三十九年の刊行であり、それに収録された諸作品は、同三十五年頃から執筆されていたものである。『考えるヒント』収録の諸作品は、小林の言葉を借りれば、「今日の学問のやうに、事実を対象として、その観察の領域を拡げて行くといふ道は採ら